＜前回＞オリエンテーション

Ａ．テーマ：「中世キリスト教から宗教改革へ」

Ｂ．目的

Ｄ．確認事項

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（火３・木３）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

成績は、レポートにて。

Ｅ．授業スケジュール

＜導入＞ゲルマン民族移動から中世へ

（１）ゲルマン大移動のもたらしたもの

０．「半島のヨーロッパ」（佐藤、１）、「先史時代から「ヨーロッパ」への異民族の侵入が常態化」（２）、「ヨーロッパ半島への異民族の東方からの反復的来襲」（３）

１．古代から中世への転換期：ローマ帝国からポスト・ローマ国家（小国家時代）へ
　　政治的統合から宗教的文化的統合へ

２．移動＝民族形成

・民族移動後の数百年＝エトノス生成、流動性の高い集団から、民族と呼ばれる政治集団が創出

・ローマ的秩序の外部としてのゲルマン、ライン川の向こう側＝「まつろわぬ土地」

３．従来の学説

「いわゆる暗黒時代」

４．古代の終焉の理由：巨大すぎた領土と経済構造の変動がマクロな要因となった。
　　そこにゲルマンの大移動が起こり、土台から崩壊することになる。

（２）ゲルマン民族とキリスト教

ローマ帝国による国教化にもかからず、国家自体（西ローマ帝国）の崩壊により、政治権力との関係構築をゼロから行うことが必要になった。

５．西方教会（ローマ教会）の地位の確立： レオ１世、グレゴリウス１世

ローマ司教のみが「パパ＝教皇」と呼ばれることになるのは６世紀、コンスタンティノープル司教は総大司教と名のる。

６．ゲルマン民族のキリスト教化：まず異端的キリスト教が次に正統キリスト教が。
　　ゴート族はまずアレイオス派キリスト教を受け入れる。

７．西ゴート人・ウルフィラ（Wulfila. 311-382）

・ゲルマン民族の大移動という動乱のなか、彼は文字を創り（ギリシャ語とラテン語から文字を借りる。２文字はルーン文字から）、聖書を母語に翻訳し遂げた。ゴート族への伝道。

・「銀文字聖書」（６世紀の写本、スウェーデンの国宝）。東ゴートのテオドリクス王に献呈。

・＜ God ＝神＞のはじまり。

８．カトリックへの再改宗＝西方教会の基礎の確立

↓

アレイオス派キリスト教とカトリックとの対立。ボエティウス

２．西欧キリスト教世界の形成

（１）西欧キリスト教へ確立

１．ゲルマン後継国家において、教会はカトリック教会の支部であるものの、「教皇以下の聖職者制度としての Hierarchia とは関わりなく独立し、ただ信仰上の事項に関してのみ「道徳的に」教皇の公式の司教の下に服従する義務を有する」「いわゆる「地方教会」(Landeskirche)を形成した」、「教皇権の発達に従って対立の度を加えたが、その対立はすでに中世初期にその端を発し、中世における政治抗争の因をなした」（石原謙『キリスト教の源流』岩波書店、566-567 頁）

↓

西欧ラテン世界における教会的秩序の分析：教権と俗権との関係は複雑。

２．レオ一世（在位 440-461）

「民族移動の混乱期においてすでに中世ヨーロッパにおけるカトリシズムの中心勢力をなるべき礎石を据えた第一の基調は、言うまでもなくローマ教皇の東帝国およびビザンティン教会からの独立と、西方諸民族の精神的指導権の確立とである」（554-555）

「レオ一世以後のローマ教皇、殊にグレゴリウス一世はペテロの聖座の継承者として、地上における「キリストの代理者」（Vicarius Christi）の地位を占め」（565）

↓

「ペテロ＝岩＝教会」という理念の成立の意義と問題

３．マタイ福音書 16 章 18 節

「わたしも言っておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。」

４．グレゴリウス一世（在位 590-604）

ゲルマン諸民族のカトリック化の意義を認識していた（ゲルマン宣教構想）。

ビザンティンからフランクへの転換　→　ゲルマン宣教の意義と問題

＜グレゴリオ聖歌＞

「アウグスティヌスはその『告白』（四〇〇年ころ）のなかで、「ミラノ教会では、歌をうたって、たがいにはげまし合うという習慣がおこって、兄弟たちは、声も心も一つになって、非常に熱心に、その習慣にしたがっていた。……ちょうど、このころ、東方教会の風習にしたがって、賛歌と詩編を歌うという習慣が、定められたのである」」と記している。

五世紀のレオ一世、グラシウス一世、とくに六世紀末から七世紀初頭にかけてのグレゴリウス一世。「聖歌の形式に大きな貢献があった」（皆川達夫『中世・ルネサンスの音楽』講談社学術文庫、2009 年、33-34）。

「グレゴリオス聖歌の名は、前にあげたローマ教皇グレゴリウス一世にちなんでいるわけだが、この教皇が聖歌の形成に大きな役割を果たしたことは確かであっても、今日歌われている形でのグレゴリオス聖歌が、この教皇の創始ないし編纂によるものであるという歴史的根拠はない。」（35）

「カルル大帝（七六八―八一四年在位、八〇〇年に教皇より加冠される）がローマ教皇と結んで西ローマ帝国を再興するに及んで、西ヨーロッパ全域にキリスト教が拡まり、同時に統一的な聖歌が普及することになった。」（34）

（２）中世社会の構造と動態

５．中世社会の力学：

内的要因（政治的経済的）：教会と王権（教皇と皇帝）、都市と農村

外的要因：キリスト教とイスラーム

６．キリスト教のダイナミズム：

イエス運動の宗教理念＋制度化

７．中世社会の変動と新しい宗教性の展開：下部構造から上部構造？

・農業革命(11 世紀を中心に。二圃制から三圃制へ。犂や水車の改良)

→　都市（自治都市へ）の発展、都市同盟（ロンバルディア同盟、ハンザ同盟)、交通路による都市の交流、

・都市民衆の宗教性　→　異端的民衆運動と教会の対応

十字軍（アルビジョア十字軍・1209-1229。アルビ派＝カタリ派）

新しい修道院運動・托鉢修道会（ドミニコ会、フランシスコ会）

異端審問制度

８．「十二世紀後半には」「それまで平信徒は宗教と信仰の問題を、教会に委ねておけばよいと考えていた」「けれども都市化の波をかぶった民衆は、そのような受け身の信仰生活によっては心の安らぎをうることができなくなった。」（坂口、31）

９．長期にわたるダイナミズムと安定度の高い構造性

（３）中世都市とキリスト教

10．古代都市（ヘレニズム都市）との関係→地域的多様性

・立地上の連続性（古代の集落やキヴィタス(新市街に対する旧市街)の改変）

・新たな都市空間の創出＝中心地としての都市

「中世都市は、地域の手工業生産、消費、交換市場の中心として、また軍事的、宗教的、政治的、行政的機能を備えた「地域的中心」として、漸進的にヨーロッパの政治社会関係を変容させていった。」（河原、32）

11．7 世紀以降の人口増加、土地の開墾・技術改良による農業の集約化と生産力の増大。

10 世紀以降、古典荘園制の衰退によって、荘園制度下で生活していた不自由な農民や手工業者が近隣の都市的定住地へ移動。

14 世紀：ヨーロッパの総人口 7500 万人の約 20%（1500 ～ 1700 万人）が都市の居住。

中世末期までの都市化は北イタリアとネーデルランドで顕著。

・大都市：パリ(8-20 万人)、ミラノ（10-15)、フィレンツェ（10-12)、ヴェネチア（12)、ジェノバ（10)、ケルン(5)、ロンドン(5)、ピサ(4)

・地域の中心都市（1-4)、中都市(1)、小都市・極小都市

・都市のネットワーク、同盟（ハンザ同盟など）

中央と周辺・辺境のダイナミズム、旅する人々

・宗教改革期には、ヨーロッパ諸都市には、思想レベルでの独自のネットワーク（寛容のネットワーク）が存在していた。

12．キヴィタスと司教座、商品と貨幣流通の出入り口（ヴィク)、行政と流通の拠点（ポルトゥス)、「保護された集落」（ブルグス)・市壁の建設

13．「文化としての都市」「ヨーロッパ中世都市がキリスト教という宗教を軸にまさしく新たら都市空間をつくりだしたという点」（河原、7）

↓

都市の両義性：天上の都市と地上の都市の区別（アウグスティヌスの『神の国』）

聖なる都・エルサレム　→　天上の都市としての修道院

悪徳の場としての都市・バビロン　→　托鉢修道会の役割

（都市の浄化→都市的活動の正当化）

14.「市民」の登場：都市の自由と自治を享受し担う主体。制約により市民権を得、権利とともに義務（軍役など）を負う。

・市民以外の都市住民：外国人、異教徒（ユダヤ人、ムスリム）、聖職者（特権的存在）

・女性は政治的権利を持たない。富裕層と貧困層の二極化→放浪芸人、物乞い、娼婦などの周縁民を生み出す。

・相互扶助の組織化：特定の聖人に帰依し教会から特別の保護・特権を受けた人々（聖人衆、教会祭壇民。聖マリア衆→都市自治団体を構成する有力メンバー）、同業ギルドや様々な兄弟団。

15. 都市の暦（守護聖人の祝祭など多様な祭礼と宗教儀礼）→演劇空間としての都市
公共時計の出現　→時間の秩序化
（→近代へ。ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ――後期近代における自己と社会』ハーベスト社。）

16.「古代／中世／近世・近代」という区分の意味。
ヨーロッパ史と日本史

＜参考文献＞

１．佐藤彰一『中世世界とは何か』（ヨーロッパの中世１）岩波書店、2008 年。

２．ピーター・ブラウン『古代末期の世界――ローマ帝国はなぜキリスト教化したか？』刀水書房。

３．Ｈ・Ｉ・マルー『教父時代』平凡社ライブラリー。

４．Ｍ・Ｄ・ノベルズ他『中世世界の成立』平凡社ライブラリー。

５．Ｊ・ペリカン『中世神学の成長（600-1300 年）』教文館。

６．リーゼンフーバー『中世哲学の源流』創文社、『中世思想史』平凡社ライブラリー。

７．鈴木宣明『ローマ教皇史』教育社。

８．Ｃ・ブルック『中世社会の構造』法政大学出版局。

９．増田四郎『ヨーロッパ中世の社会史』岩波セミナーブックス。

10. 河原温『都市の創造力』（中世ヨーロッパ２）、岩波書店。

11. 小澤実・薩摩秀登・林邦夫『辺境のダイナミズム』（中世ヨーロッパ３）、岩波書店。

12. 池上俊一『儀礼と象徴の中世』（中世ヨーロッパ８）、岩波書店。

13. 阿部謹也『中世を旅する人びと――ヨーロッパ庶民生活点描』ちくま学芸文庫。
『中世賤民の宇宙――ヨーロッパ原点への旅』ちくま学芸文庫。

14. 坂口昂光『中世の人間観と歴史――ﾌﾗﾝｼｽｺ・ﾖｱｷﾑ・ﾎﾞﾅﾍﾞｪﾝﾄｩﾗ』創文社。

15. 山内進『十字軍の思想』ちくま新書。
「十字軍と「正戦」の思想」（京都ユダヤ思想学会『京都ユダヤ思想』第８号、2017年）。